

西尾、吉良方面の道
 右面:文化11年申戌5月吉日建
 正面:西尾、平板、土呂、吉良
 西尾藩主の参勤交代、三河湾
 からの海産物の輸送に利用される。



成信(左)と江戸ヶ寄の墓

芭蕉句碑（十王堂境内）
”ここも三河 むらさき麦の
かきつばた” はせお
寛政5年芭蕉100回忌に建立
むらさき麦、高野麦、紺屋麦
とも言われ、茎や穂が紫色に
変色するのでこう呼ばれていた
”粒小味不佳”とのことで食用
不向きとされ戦後まで細々と作
られていたがいつしか幻の麦と
なる。最近再現された。



東棒鼻跡

藤川宿の東入口、歌川広重の東海道五拾参次の絵“棒鼻ノ図”に描かれている。
 “棒鼻”とは駕籠を担ぐ棒や天秤棒などの端をさす鼻とは端のこと、棒を宿場とすれば鼻は宿場の外れのこと、境に棒杭が立っている。
 西の外れに西棒鼻跡が残る。



入口

藤川宿 (岡崎宿へ1里25町)

藤川は山綱川北側にあり藤が美しい集落であった。天正8年(1590)に田中吉政が現在地に移転させた。慶長6年(1601)正月藤川に朱印状が発給されて江戸から37番目藤川宿となる。当時の町並みはおよそ5町54間と短く、宿維持は困難であった。慶安元年(1648)三河代官鳥山牛之助は当時舞木村の中心であった市場を藤川宿の東側に移転させ加宿「市場村」(新町又は東町)を形成させた。天保14年当時、本陣、脇本陣、問屋各1、旅館36



[弥次・喜多]

赤坂の宿の騒動のことで同宿人と言ひ合いのうちに
 ”みほとけの誓ひと見えて法蔵寺
 なみあみぶくろはこのめいぶつ”

棒鼻の茶屋の軒をみて

”ゆで蛸のむらさきいろは軒毎に

本宿 ぶらりとさがる藤川の宿”

本宿 古くから街道とともに開けた街、中世以降は法蔵寺の 門前町を中心に町並みが形成赤坂宿と藤川宿の中間にあり間の宿としての役割を果たす。共和2年(1802)本宿村方明細上帳によると家121軒、家並長さ19町立場茶屋2軒(宝蔵寺前、長沢村境四谷)古くから、召縄、麻袋、麻紐の細工が盛んであった。また家康公が食したと言われる法蔵寺ダングも名物であった。

法蔵寺 (浄土宗)

大宝元年(701)僧行基が自刻の観音像を安置して創建と伝えられる。その靈驗で文武天皇の皇后が皇太子出産したことから出生寺と賜号されたといふ。至徳2年(1385)京都総本山円福寺の龍芸上人が法蔵寺と改名、浄土宗ひろめ三河の三檀林(学問所)として重きをなす。足利、今川、松平の保護を受け発展する家康8歳の正月、今川に人質行く前にここで密かに手習いを受けたという。幕府の庇護厚く諸大名も下馬し参拝した。境内には松平家の菩提所、新撰組近藤勇の首塚などがある。

宇都野氏は宝暦年間(1751-63)
3代立碩が当地に開業、7代龍碩
はシホルトの門人周弼に医学を学
んだ蘭方医。安政年間に当時として
画期的な種痘を施している。

元禄11年(1698)旗本柴田出雲守勝門が知行所支配のため陣屋を設け明治まで続く、代官職は富田家が世襲した。現存住宅は文政10年(1827)の建築。

西の棒鼻跡

